

第2章 誤飲の背景にある乳幼児の行動特性

消費安全調査委員会による「消費者安全法第31条第3項に基づく経過報告：子どもによる医薬品誤飲事故」(2015)によれば、平成18年以降、5歳以下の子どもによる医薬品の誤飲事故件数は増加傾向にあるという。平成24年1～12月に公益財団法人日本中毒情報センターが収集した誤飲事故のうち、症状を有した事故は869件であり、このうち87.9%にあたる764件は子ども本人による誤飲だった(その他は、大人による与え間違い)。さらにその71.9%(549件)は1歳から2歳の子どもによるものだったということである。

医薬品の誤飲事故を防止するためには、乳幼児期の子どもの行動特性を把握することが重要である。そこでここでは、誤飲事故が特に多く発生している0歳から2歳までの時期と、それ以降の時期(つまり、2歳から5歳まで)にわけて、誤飲にかかわる行動の発達をみていきたい。

1. 0歳から2歳まで

1.1. 運動発達

運動発達には一定の順序があり、頭部から尾部、中心部から周辺部、粗大な運動から巧緻な運動へと発達が進む。上肢も同様で、体幹に近い中心部から末梢方向へ、つまり上腕から前腕、手掌、指という順に発達が進んでいく。

手先の運動は次のような発達過程をたどる。生まれたばかりの赤ん坊の手はいつでも軽く握られている。しかし手先に何かに触れると、強く握ろうとするような動作がみられる。これは赤ん坊自身の意図とは関係なく生起する生得的な把握反射である。把握動作の発達については、ハルバーソン(Halverson)の「把握の発達」図がよく知られている。これは16～52週(4ヶ月～1歳前後)の子どもが積み木などを操作する場面を分析したデータに基づき、10種類の把握動作を出現順に示したものである(Halverson, 1931)。4ヶ月前後ではまだ、目の前にあるものをつかもうとしても手が触れることはないが、5ヶ月頃になると手掌全体をものに押し付けるようにして握る動作がみられるようになる。その後は、指でつかんだりつまんだりといった微細な動作が出現してくる。

丸山(1986)は、手先の運動発達を姿勢や社会性といった他の側面と関連させ、次のようにまとめている。ハルバーソンが示したように、意識的に対象をつかもうとする動作は4ヶ月前後に出現するが、この時期にはまだ把握反射が完全には消えていないため、ものを手放すことができない。5～6ヶ月になると、支えられてのお座りができるようになることから、手の自由度が飛躍的に高まり、目で見えた世界と手で操作する世界を一致させやすくなる(目と手の協応)。これを背景として、子どもは目を見た対象に手を伸ばし、つかめるようになる。さらに7ヶ月頃になると、つかんだ対象を随意的に放せるようになり、「つかむ-放す」という一連の動作が完成する。ただし、ハルバーソンも指摘したように、この頃の把握は熊手のような形にした手

掌を対象にかぶせるような動作である。7ヶ月頃の子どもは、身の回りにあるものなら何にでも手を伸ばし、つかんだり、振ったり、打ちつけたり、なめたりして遊ぶ。こうした遊びのなかで、手の機能分化も進んでいく。両手の分化と協応が進むことにより、ものを一方の手からもう一方の手に持ちかえたり、打ち合わせたりといった動作が可能になる。また、手掌と指の分化が進むにつれ、親指と他の4本の指を対向させてつかむ動作や(8ヶ月頃)、親指と人さし指(と中指)でつまむ動作(10ヶ月頃)、親指と人さし指の腹や先を「トング」や「くぎぬき」のように使って小さいものをつまむ動作(10~12ヶ月頃)もみられるようになっていく。

1.2. 主要な探索手段としての口

0歳から2歳の時期は、手先以上に口が環境の主要な探索手段となる。手先の微細な運動調節は2歳頃を過ぎないと可能にならないが、口周辺の筋肉や感覚は全身の身体部位のなかでも発達が早い。生まれてまだ1ヶ月しか経たない赤ん坊でも、口腔内の皮膚感覚によってものの特性を適切に把握する能力を持つことが実験的にも確かめられている(Meltzoff & Borton, 1979)。口の感覚は、発達のごく初期からかなり洗練されているのである。

口周辺の筋肉や感覚が早くから発達する背景には、口が赤ん坊の生存に必要な哺乳機能をもつからである。口には把握反射同様、生得的な反射である吸啜反射が備わっている。これは口の周囲に何かに触れるとそれを啜って吸いつく動作だが、吸啜反射以外にも、口の周囲に何かに触るとその方向に頭をまわして口を開く探索反射や、そのものを舌と唇を使って啜えようとする捕捉反射もある。生後半年頃からは離乳食も始まり、咀嚼(口腔内の食物を細かく噛みくだき、唾液と混ぜること)や嚥下(飲み込みやすいかたちにした食物を飲み込むこと)といった口腔機能も発達していく。

口が乳児の主要な探索手段であることが、3歳以下の子どもに誤飲事故が多く発生する理由のひとつであることは間違いないだろう。さらにもうひとつ、この時期の子どもの誤飲を誘発する要因がある。それは新奇性恐怖がまだ十分に認められないことである(外山, 2008)。新奇性恐怖とは、これまでに食べたことのない新奇な食物を警戒する行動様式であり、雑食性動物一般に認められる。単食性動物は特定の食物しか摂取しない一方、雑食性動物は広範な食物を摂取できるため、環境によく適応できるといわれている。しかしそのために、単食性動物にはないリスクも背負っている。摂取できる食物の範囲が広いため、誤って毒性のある食物を摂取する危険性が高いのである。これを回避するために、雑食性動物には新奇な食物には警戒してかかるという行動様式、すなわち新奇性恐怖が備わっているのである。問題はこの新奇性恐怖が発現する時期である。人間の場合、新奇性恐怖は離乳が終わる頃、つまり2歳頃から顕著になる。その結果、多くの親が子どもの「食わず嫌い」に手こずらされることになるのだが、2歳以前は逆で、新奇性恐怖が低いため、どんなものでも口に入れてしまうのである。

0歳から2歳頃までの時期は、手先を器用に使った運動は十分でないものの、口周辺の感覚や筋肉の発達は早く、1ヶ月児でもかなり洗練された口腔感覚を有している。そのため、この時期において口は主要な環境探索手段となる。新奇性恐怖が顕著になるのは2歳前後であるこ

となどから、2歳頃までの子どもは、何でも口に入れたがる。この時期の誤飲事故を防止するためには、以上のような特性を十分に踏まえた対策が必要となる。

2. 2歳から5歳まで

2.1. 運動発達

1歳を過ぎると歩行が安定し、走ったり、手すりを使って階段を上ったり下りたりできるようになる。自分で自由に探索できる空間が広がり、言葉を使ったコミュニケーションもとれるようになっていく。2歳を過ぎると、手先はますます器用になり、手の動きを上手にコントロールできるようになる。描画の際には往復線だけでなくぐるぐると円を描けるようになり、粘土遊びの際には粘土を叩くだけでなく、叩いてねじるとか、つまんで形を変えるなど、複雑な操作が可能となっていく。

3歳頃までは手先を使った微細な運動はまだ十分でないものの、3歳を過ぎると両手指の分化と協応がいっそう進む。そのため、筆記具やはさみなどの道具を使い、手順を踏んでものを作れるようになる。箸のように精密な動作を必要とする食具や、包丁のように左右の手の動きをコントロールしなければいけない道具も使いこなせるようになる。はさみで形を切り取るためには、一方の手ではさみを持ち、もう一方の手で紙を動かしていくというように、左右の手の動きを制御しつつ連続した動作を行わなければならないが、こうした動作も3歳以降、年齢があがるにつれ、速くかつ正確にできるようになっていく。

2.2. 自我の芽生え・決まりの理解

1歳を過ぎる頃から、「～をやりたい」とか「～が欲しい」といった気持ちが強くなり、それが叶わないと、大きな声で泣いたりのけぞって暴れたりする行動がみられるようになる。これは自我が芽生え、自分の意思を他者に伝えたいという欲求の表れといえる。特に1歳後半を過ぎると、自分でやれることが増えてくることから、何でも「じぶんでやる」と自己を強く主張したり、誰かが手伝うと強い抵抗を示したりするようになる。こうした一方的な自己主張が顕著になることから、この時期を「反抗期」と呼ぶことがある。

3歳頃になると徐々に他者を受容するとか、他者に受容されたくて自分の行動を調整できるようになっていく。たとえば、親や園の先生に誉めてもらいたくて、片付けや食卓の用意といった手伝いをしたがるようになったりする。この頃から、生活のなかの基本的な決まりもわかるようになる。ただし、「危ない場所に近づいてはいけない」とか、「使ってはいけないと言われたものには触らない」といったことを理解はしていても、実際に自分の気持ちを制御し、行動に移すことは容易でない。自分では決まりを守れないのに、友だちが守らなかった場合には強く非難するといった行動も多い。

2歳から5歳までの時期は、自己主張が強くなり仲間や大人との葛藤も多くなる。決まりについては、それを守らなければいけないことを理解しているとはいえ、行動に移すことが難しい時期でもある。しかし、生命にかかわる決まりについては、周囲の大人が断固としてその重

要性を繰り返し伝えていく必要がある。

文献

Halverson, H. M. (1931). An experimental study of prehension in infants by means of systematic cinema records. *Genetic Psychology Monographs*, 10, 107-283.

丸山尚子 (1986) 「0～3歳児の手」(pp.2-21). 子どもの遊びと手の労働研究会(編)『あそぶ手・つくる手・はたらく手』ミネルヴァ書房.

Meltzoff, A. N., & Borton, R. W. (1979). Intermodal matching by human neonates. *Nature*, 282, 403-404.

外山紀子 (2008)『発達としての共食』新曜社.